
ヴァリアーと吸血鬼

夜血六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァリアーと吸血鬼

【Nコード】

N3372V

【作者名】

夜血六

【あらすじ】

吸血鬼界にいる主人公が、逃げ出した吸血鬼界の王子を人間界で探す物語です。

王子…？

「血月…どうしよう…」
ちつき

「どうしたの？霧紗」
きりさ

「この世界の王子が、この世界から逃げてしまったの…」

「嘘！」

「ほんと…だからね、血月にその王子を探して、連れて帰ってほしいの！」

「いいけど…どこの世界にいるかは…」

「人間界よ。血月、人間界に行ってみたかったみたいだから、丁度いいかと思って…」

「その仕事、喜んで受ける！」

「じゃあ、頼むね。」

- - - - -

「おなかすいた…最近の「人間」ってあまり美味しくないから腹足しにもならない…」

人間界に来れたのは嬉しいけど…正直言って生活しづらい……

フワっ

風が吹くと同時に甘い香りが漂ってくる。

「…久しぶり…美味しそう。」

僕が放った言葉は、また吹いた風の音に紛れて誰も聞こえなかった。

香りだけを頼りに美味しそうな人間の元へと行く。

その香りは、建物からする。

「この中か。広いな…」

音をたてないように中へ入って本格的に「人間」を探す。

「（ん？香りが近づいてはいるが、人の気配がしない…）」

「任務までなにすっかな。」

突然聞こえる声に驚いて、足音を立ててしまった。

「…！そこにいる奴、出てきなよ。」

ティアラをのせた子が戦闘体制に入って言っ。

「（…あの王子はティアラなんて乗せてたっけ？…）」

「いつまで隠れるつもり？」

…殺気を放ってるな…おとなしく姿を現すべきか…

「僕をどうするつもりだ？」

「んー。敵っばいから殺す？」

「なんで殺されなきゃいけないの？」

「だって、ここヴァリアーだぜ？一般人が気配まで消して来るようなところじゃねーし」

「何それ？」

「ここが何処か知らねーの？」

「知らないし、関係無い。」

「じゃあ何で此処に来たんだよ。」

「そりゃあ、食事しに」

「はっ、アンタにあげる飯なんてないし」

「人間ごときの飯を貰おう、なんて思わないね。あんただけで十分。」

「おまえも人間じゃん」

「俺は吸血鬼なの。」

「!?!」

「って訳で血を頂戴ね？」

そういつてティアラをのせた子の首に噛みつきつとしたけど…
人の気配がする…見られてる？

「ねえ、誰？さっきからそこで見てるんでしょ。」

「!?!」

「早くしないとこの子、僕の餌になるよ？」

「…ミーは別に墮王子の事はどうでも良いんですけど、ボスが呼んでますんでー」

「へえ、で、この子を手助けに来た。と。」

「まあ結果的にそうなりますかねー」

「（クスッ でも、遅いかな？」

ガブッ

「!?!…っ！痛い」

「静かにしてくんない？折角生かしてあげようと思ったのに、殺すよ？（まあ、僕の種族の掟で殺すなんてできないけど。）」

「「……」」

「そう。それでいい。（大体これで黙ってくれるんだよね。）」

「美味しかった。生かしておくことにするよ。
でも、一つ聞いて良いかな？」

「……？」

「何で君はどの人間よりも美味しいの？」

「…は？」

「君の血はそこら辺の人間と違い、特別に美味しかった。…吸血鬼じゃないの…？」

ポンッ

「先輩って吸血鬼だったんですかー。あ、これは報告しないといけないD」

グサッ

「…先輩ー。痛いですー。」

「テメエは黙ってる
で、ハッキリ言っとくが、俺は吸血鬼じゃねえ。普通に王子なんだよ。」

「王子…？（やっぱりあの方？…でも「吸血鬼じゃない」って…）」

「そ。俺、王子」

「…（あの方法を試してみるか。）」

「どうした？」

「…何でもない。それより、記憶を消させてもらうね——」

王子…？（後書き）

今更なんですけどー、「血月」が主人公ちゃんです。ハイ。
言っの遅くてすみません（泣

記憶（前書き）

続きまして第二話です

記憶

「え？いや、何でそうなの？」

「俺等の習慣が関わってくる。」

「ふーん。」

スッ

「って訳で記憶消すから。」

「…バイバイ」

シュンッ

「あれー？先輩いつの間にミーの隣にいますかー？あ、それに血が。」

「フラン…」

「はい？」

「さっき起こった事、覚えてねえのか？」

「？ミーはずっと墮王子を探してたんですけどー。」

「吸血鬼に会ったんだぞ？！覚えてねえのかよー！」

「墮王子の妄想じゃないんですかー？」

「ちげえよ蛙てか信じろよ！」

「誰も信じないと思いますけどねー。」

「あー。ならボスに話す！フラン！お前ついてこい！」

「何でミーまで…」

「いいからついてこい！」

「……………」

—In XANXASの部屋

「……………」

「ボスー。聞いてくださいよー。」

「ああゝ？」

「さつき、吸血鬼に会ったんだ！」

「はっ、どうせ遅れてきた言い訳をしてんだろ。」

「先輩がこればかりで煩くて…」

「じゃあ証拠はあんのか？」

「これ。」

ベルはそう答えて噛まれた場所をさす

「!?!」

「…」

「信じるだろ?これで」

「…その吸血鬼はどんな奴だ?」

「14歳位のクソガキ。」

「……強いのか?」

「ああ、殺気が半端なかった。」

「名前は?」

「知らねえし」

「ハント。所詮カスはカスだな。」

「どうしますー?」

「そうだな…ヴァリアーいれたら結構な戦力になるはずだ。」

「だったら…」

「そいつをヴァリアーの一員にする」

「これ、ボンゴレに連絡しますー?」

「ああ。一応いたら捕まえて此方に寄越せつてな。」

「あ、あいつテレポートが使えてたぜ?」

「なら師匠に頼んで精神世界に閉じ込めてもらえばいいじゃないですかー。」

「蛙の癖にいいこと言うな。」

「ですよー。だからいい加減この被り物を外してもいい」

グサッ グサグサグサッ

「ゲロッ。先輩、これ結構いたいんですよー。」

「ししし」痛そうには見えないけどな」

「フンッ。早く探せ。」

「では失礼しましたー。」

記憶（後書き）

…XANXAS使いにくっ！
今更氣がついてどうするんだよ、どうもしねえよW
↑

詮索（前書き）

タイトル…これで良いのか？

詮索

「皆！さっきヴァリアーから連絡があっただけど、吸血鬼が出たらしい。」

「悪戯じゃないんですか？」

「いや。悪戯じゃない。実際にベルが噛まれたしその痕をザンザスとフランが見てる。」

「ふうん。でも集めたのには訳があるんですよ。」

「そうなんだそいつを見つけたら、ヴァリアーに寄越せ、だって。」

ペラッ

「これが、その子の情報ね。捕まえたら直ぐに気絶させて、骸が精神世界に閉じ込めるなりなんなりして。その子が逃げなかったらなにしても構わないから。」

「わかりました。」

「じゃあこれで解散ね。」

- - - - -

― 数日後

「あの子全然見つけれないな。」

「そうなのな。」

「!?!」

「獄寺、どうした？」

「あそこにいるのって、ヴァリアーの言っていた奴じゃ無いですか？」

「あ、本当だ。」

「どうするなのな？」

「そりゃ捕まえるに決まってるじゃん。」

そお

「(ボソッ あいつ何か喋ってますよ？」

「あの子の血、美味しかった。」

「(ボソッ ベルの事を言ってるなのな。」

「でも…王子つてのが気になる…」

「(ボソッ あいつ、狙われてる事知らないのか？」

「まあいいや。血推にでも調べてもらうか…」

「(それに、誰か着いてきている。おそらく…3人。だが何の為だ？」

「（後を追つか）」

シュンッ

「「「！！」」」

「消えた……」

「……あいつで確定ですね。」

「……そうなのな。」

「……ああ。とりあえず屋敷に戻って、会議だ。」

「じゃあ戻りましょう。」

「……」

「……でか……」

結局着いていったけど……こんなにでかい家ってあるんだ……

「さっきの子も美味しそうだけど、ここからも美味しそう甘い香りがする……」

「……」

「……という訳でこんな姿してる。」

「ボンゴレ、あの子でしょう？」「

「「「「！！」」」」

「けっ、あいつ着いてきやがったのかよ。」

「そうみたいだね。でもこれで手間が省けたんじゃない？（黒笑）」

「じゃあ各自行動してね。…って雲雀さんいないし。」

詮索（後書き）

…ボンゴレの皆さんは書きやすいですね…

捕獲（前書き）

雲雀メインだよ

捕獲

「よし。今日はここでご馳走させて貰おう。」

シュンッ

—inボンゴレアジト

『侵入者発見。侵入者発見。D地区に侵入者発見。』

「はあ。セキュリティありかよ。めんどくさい…。」

ヒュンッ バキッ

「ねえ。ここのセキュリティなに壊してるの?」

「ん?壊れるほど脆かった、って事じゃない?(黒笑)」

「…咬み殺す!」

ヒュンッ

「わお。なに隠してるのかと思えばトンファーか。」

「それがなに?」

ヒュンッ

「いや?何でもないよ?それより、いい動きをしてるね。」

「君こそ。でも攻撃して来ないなんてつまないんだけど。」

ヒュンッ

「攻撃して欲しいわけ? (黒笑)」

「つまらないじゃないか。」

シュンッ

「!!(この子、いつの間に!)」

「じゃ、この攻撃だけにしておくよ。まあ、攻撃よりも食事させてもらう、の方が正しいけどね (黒笑)」

ガブッ

「…っ!」

「へえ、声出さないんだ。」

「あ…たり…まえっ! 負けたみたいで…嫌だから…ねっ。」

「そう。ならこれは? (黒笑)」

そういつて、さっきよりも深く牙を食い込ませる

「くっ! もう…止めたらっ! これ、結構…痛いんだけど…」

「まあ、いいや。このくらいにしておくよ..っ!」

「どうか..したの? (黒笑)」

「?!」

「やっと効い..た?」

「お前..何を..した..」

「何って睡眠薬を首に付けておいたんだ。」

「君は、自ら睡眠薬を飲んだんだよ?」

「こうなることを..予想..してたのか?」

「予想はしてないけど、念のため、ね (黒笑)」
「にしてもよく寝ないね。」

「何か嫌な..予感..がする..か.....ら..n」

パタンッ

「スーシュー」

「確保 (黒笑)」

.....

「小動物、確保しといたよ。今のうちにヴァリアーに渡しときなよ。」

」

「…有難うございます、雲雀…っで、ええ！雲雀さん！血！」

「ああ、これ？その子に吸われたんだよ。じゃ、僕はこれで。」

捕獲（後書き）

血月、捕まったよ…
いや、僕が捕まらせたんだけどね…（苦笑）

ヴァリアーに渡る（前書き）

ぐだぐだ…

ヴァリアーに渡る

「ボスー。ボンゴレがあのかソガキを捕まえたそうですー。」

「ハン。情報は掴めたか？」

「今師匠が拷問？してるみたいですけどー、ぜんぜん情報が出ないそうですー。どうしますかー？」

「情報が出ないんだったら、さっさと寄越せ。カス共にそう伝えとけ。」

「わかりましたー。」

「…連れて来たよ。」

「ししし♪誰が来るのかと思えばエース君じゃん。」

「悪かったね」

「悪いとも言つてないし♪」

「ん？これ何？」

「ああ、これは逃げないようにするための物。」

「そんだけ？」

「うん。一応、ヴァリアーのうちの誰かから半径1？以上離れたら

それが爆破するようになってるからまず逃げようとしないだろって
思ってたね。」

「ししし」あつさりとそいつを渡してくれるんだね。」

「この子といると血を吸われかねないから。」

「エース君、血を吸われたんだ（笑）」

「何？君も吸われたんでしょ？その君がそんなこと言えるの？」

「カッチーン。俺王子だから言えんの。」

「僕の前では関係無いね。僕が秩序だから」

チャキ

「反抗するものは制裁を加えるだけ。」

「お、闘うの？」

シャキン

「良い度胸してんじゃん」

キイン ガキッ ドカッ ザシユッ

「うっん。煩い…」

ガキッ ザシユッ

「（イライラ）……」

「…るせえんだよ。」

キン ドカツ

「うるせえつつてんだろうがぁ！」

「「！！」」

バキッ ドカツ ドシュッ

「あー。ボスに怒られる…」

「そんなの知らないよ。」

そこを見ると既に半壊状態…

「何？サボテンにして欲しいわけ？」

シャキン

「わお。まだやるの？」

チャキ

「じゃ、いく」

ユラ

「「!」」

「ねえ、煩い、つったよねえ？」

「（ボソッ あれがさっきの奴？殺気がピリピリすんだけど」

「（ボソッ そうとしか考えられないよ。」

「今度は、吸い殺してホシイノ？（黒笑」

「「違う／し」」

「じゃあ、どうし＼くっ！」

「間に合ったかあ！というかこいつは誰だああ？」

「そいつがボスの探していた奴。」

「んま。そうなの？殺気がピリピリしてたけど。凄いのねえこんなに小さいのにvv」

「ふん。僕はもう帰る。」

「何時でもいらっしゃいvv」

ガチャ バタンッ

「で、こいつはどいつする？」

「とりあえず、ボスのところに行くぞおお！」

「いってらー。」

「行つてらっしゃい…」

「行つてらっしゃいですー。」

「ん？これって…俺がいくのかああ！」

「「「当たり前じゃん／でしょ／／／ですー。」」」

ヴァリアーに渡る（後書き）

ちなみに、ひばりさんの言っていたやつは首輪です。
中に爆薬が仕込んでます、的な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372v/>

ヴァリアーと吸血鬼

2011年10月22日00時04分発行